

心脳同一説に対する様相の観点からのクリプキの批判

林 明 弘

平安女学院短期大学 キリスト教科

(平成 8 年 5 月 22 日受理)

Kripke's Criticism of the Mind-Brain Identity Thesis from a Modal Logical Point of View

Akihiro HAYASHI

*Department of Christianity
Heianjogakuin College
Takatsuki, 569, Japan
(Accepted May 22, 1996)*

Key words : Kripke, mind-brain, identity thesis, modal logic

序

心と脳は同一であるという心脳同一説は1950年代にオーストラリアの心理学者プレイスによって主張され、スマートによって展開された。この説に対してはさまざまな反論が行なわれたが、心的過程と脳過程がタイプとして同一だとする同一説を完全に放棄すべきことを示したクリプキの議論^{1),2)}を検討し、それが近世哲学以来の形而上学に対する伝統的な考えを覆すほどの意義を有することを示したい。

クリプキの議論は様相の観点からの批判であるが、この「様相」という言葉には説明が必要である。この言葉は通常「～の様相を呈する」というフレーズで「有様・状態」の意味で使われるが、ここでいう様相はそれとはまったく意味が違う。それは「必然である」、「偶然である」、「可能である」という表現で指されるものの総称である。例えば、「SはPである」というよう

な文だけでは、その様相は分からない。しかしこれを「Sは必ずPである」とか、「SはたまたまPである」とか言えば、前者は必然様相の文であり、後者は偶然様相の文ということになる。そしてクリプキは科学的言明のなかに必然の様相を持つ文が存在すること、それは同一性言明であること、即ち、「同一性を表す科学的言明は、もしそれが真であるならば、いかなる可能世界においても成り立つ必然的に真なる言明である」ということを示すことによって心脳同一説が誤りであることを示した。以下の論述においてその概略を示し、その意義を検討したい。

固定指示詞と非固定指示詞

我々は非現実な仮定に基づく推論を行なう際に「もしあの時私が～していれば、今ごろ私は～なのになあ」と考えることがある。しかし、このような文が有意味であるためには少なくともこの文のなかに出てくる「私」という表現に

よって指示されている対象が（当たり前だが）この文を発話している本人の「私」と同一でなければならない。つまり「～しなかった」という現実の世界にいる私を指示する「私」という言葉によって「～していたら」という非現実な仮定に基づく可能世界（我々はそのような「もし～していたら」という世界もあり得た、可能であったと考える）にいる「私」を指示することができるためには、「私」という言葉は現実の自分を指示するだけでなく、非現実な可能世界にいる自分をも指示することができなければならない。そしてそれができるためには「私」という言葉が、現実の世界にいる私と可能世界にいる私の両方を同一の対象として指示していなければならない。（もし両者が同一でなければ、このような非現実な仮定に基づく推論はすべてナンセンスになってしまう）。

このように言うとはどんな表現でも現実の世界にある対象と同一の可能世界にある対象を指示することができるのではないかと思われるかもしれない。しかしそうでない場合もあるのである。次の同一性を表す文を考えてみよう。

「日本一高い山は富士山である」

我々が住んでいる現実の世界においては確かにこの文は真である。しかし、地殻の変動が起こって比叡山が富士山よりも高くなったという可能世界（これは実際あしたおこるかもしれない）を考えてみよう。この世界において日本一高い山は比叡山なのであるから「日本一高い山は富士山である」という文は偽となる。つまり「日本一高い山」という確定記述（指示対象が一つに定まる言語表現のこと）は現実世界と可能世界の両方において同一の対象を指すとは限らないのである。

これに対して「富士山」という固有名はそうではない。地殻変動が起こって富士山が日本で二番目に高い山になったという可能世界においても「富士山」という固有名は現実の世界における富士山と同一の対象を指示する。仮に富士山の上に隕石が落ちて富士山が無くなった、という可能世界を考えてみても、その世界にいる人が言う「富士山」という固有名は現実世界における富士山と同一の対象を指示する。それは

「ここにあった蜜柑どうした」「ああ、俺が食べちゃったよ」という場合と同様である。つまり固有名は確定記述とは異なり、いかなる可能世界においても同一の対象を指示する表現なのである。クリプキはこのような表現を固定指示詞と呼び、それ以外の非固定指示詞と区別する。

自然種を表す言葉が固定指示詞であること

「自然種」とは耳慣れない言葉かもしれないが、人工物の対概念だと考えれば分かりやすい。「とかげ」、「わに」、「水」、「山」、その他たくさんあるこれらの表現すべてがはたして固定指示詞であるかどうか、これに対する答えがイエスであれば、同一性を表す科学的言明の主語の部分は自然種を表す言葉でできているから、その文はいかなる可能世界においても真として成り立つことになる。しかしそのようなことがはたして言えるであろうか。「富士山」のような固有名が固定指示詞であることは認められるとしても、「水」のような自然種を表す言葉が固有指示詞であることはどうして言えるのか。

「水は H_2O である」という文を考えてみよう。「水」という自然種を表す言葉が固定指示詞であるなら、そしてその言葉の指示対象の本質が H_2O であるなら、この文はいかなる可能世界においても真として成立する文のはずである。クリプキを擁護するパットナムはそれを次のようにして示した⁹⁾。

今一つの点を除いて地球とそっくりな架空の惑星があると考えてみよう。その一点とは「常温液体無味無臭透明で喉の乾きを癒す」が組成式が H_2O でなく XYZ である物質が存在するということである。我々はこの物質を「水」と呼ぶであろうか。おそらく誰も呼ばないであろう。これは、科学者が知恵を結集して「常温液体無味無臭透明で喉の乾きを癒す」物質を造ることに成功しても、その組成式が H_2O でなければ、我々がそれを「水」とは呼ばないであろうことと同様である。つまり、「水」という自然種を表す言葉はいかなる可能世界においても H_2O を指示する固定指示詞なのである。

認識論上の手掛かりと本質

今述べた議論は「水」という言葉が固定指示詞であることを示すだけでなく、もうひとつの重要なことを示している。それは認識論上の手掛かりと本質の区別である。水の本質は H_2O であって、「常温液体無味無臭透明で喉の乾きを癒す」ことは我々が水であると同定するための認識論上の（一つの）手掛かりにすぎない。我々は認識論上の手掛かりを本質と混同してはならないのである。この二つを混同する危険は次の同一性を表す科学的言明を考えればよく理解できるであろう。

「熱は分子の運動エネルギーである」

クリプキによればこの文はどんな可能世界でも成り立つ必然的に真な文なのであるが、我々これをこの現実の世界で偶然成り立っている文だと看做する傾向がある。それは我々が熱と熱感覚を混同する傾向があるからである。熱感覚は熱があると判断するための認識論上の手掛かりにすぎない。ところが氷に触って冷たいと感じたとしても（すなわち熱がないと感じたとしても）、絶対零度でない限り、分子の運動エネルギーがあるのであるから、そこには熱があるのである。我々は熱と熱感覚を混同する傾向があるので、触ってたまたま熱いと感じるものにだけ熱があると思ひ込みやすい。熱感覚を手掛かりにして、熱の本質が分子の運動エネルギーであると発見した我々は「熱は分子の運動エネルギーである」という文がたまたまこの現実の世界でだけ成り立っている偶然に真な文だと誤って看做してしまう。ところが、我々は痛みの場合を考えてこの過ちに気づくべきなのである。痛みの感覚は痛みの本質をなしている。痛みを感じていなければ痛みはないのである。つまり「痛み」は固定指示詞なのである。このことから「熱」も固定指示詞であることに気づいてもよきそうなのだが、「熱は分子の運動エネルギー」が偶然に真だと思ひ込む我々は「痛みはC—神経繊維の興奮である」という文も同様に偶然に真な文だと看做してしまうことになる。熱の場合と違って、痛みの場合はそのような混同を犯さないにもかかわらずである。しかしこの文は

もし真であるなら、いかなる可能世界においても必ず成り立つ文なのである。

心脳同一説の誤り

自然種を表す言葉が固定指示詞であること、同一性を表す科学的言明が、もしそれが真であるなら、いかなる可能世界においても成り立つ必然的に真な文であること、これが認められれば、あとは簡単である。「痛みはC—神経繊維の興奮である」という文は、もしそれが真であるならいかなる可能世界においても成り立つ必然的に真な文のはずである。ところが必然的に真な文ではないとクリプキは言う。なぜなら我々はC—神経繊維を持たないが痛みを感じる動物をいくらでも想像することができるからである。

(PならばQ、QでなければPでない、真ならば、必然的に真、必然的に真でなければ真でない。)従って、「痛みはC—神経繊維の興奮である」という文が誤りであることになる。痛みに限らず、喜び、怒り、悲しみ、愛、憎しみ、その他何であれ、この種の文は同じやり方ですべて、誤りであると証明できる。そして、ここから出てくる結論は、心脳同一説が誤りであるということである。しかしここで断っておかねばならないことがある。心と脳の間には関係があるのである。そのことはクリプキも否定しない。だが、どのような関係にあるのか。少なくとも同一という関係にはないとクリプキは言うのである。

科学的言明の必然性

科学は実験や観察に基づいて理論を構成するのであるから常に経験科学であって、我々が(たまたま)経験できるこの現実の世界にしか当て嵌まらない理論を構成しているにすぎない、と考えている哲学者は多い。(経験に基づいて造られた理論が経験できないようなあらゆる可能世界についても成立する理論であるなどと主張することは大胆すぎるというわけである。)このように考える哲学者は間違いなく(本人が自覚しているかどうかは別にして)ヒューム及びカントの影響を受けている。そしてそれは無理からぬことでもある。因果律を否定した(自然界の

中の必然性を否定し、真の必然性は数学や論理学の必然性しかないという) ヒュームの考えは(少し大袈裟に言えば)その後二百年間の哲学者の思考を強く規制した。その結果、科学的言明は、たとえそれが真だとしても、たまたまこの現実の世界で成り立っている偶然的に真な文にすぎないという考えが哲学者の間の先入観になってしまった。これを打ち破ったクリプキの業績は特筆に値するものである。

必然性を持つその他の言明

このようにクリプキは同一性という必然的關係は対象それ自身について成り立つ論理的ないし形而上学的概念であって、アプリアリ、アポステリアリという我々がその同一性をいかにして知るかという認識論的概念からは区別されるべきだと言う。この考えに基づいてクリプキは、対象の本質的性質、つまり事象的必然性を

表す真なる命題が他にも存在すると主張する。例えば、人がその現実の両親から生まれたことを表す命題や、机が現にそれが成り立っている素材からなることを述べる命題がそのような命題であると言う。我々は自分の母が父と結婚せずに、別の男と結婚していたら、という非現実な可能世界を考えることができる。しかし、その可能世界に「私」が存在することは不可能である。なぜなら、もし、母が父とは別の男と結婚したなら、どんな子供を産んだとしても、その子供は「私」とは違う人間だからである。

このようにしてクリプキは経験不可能な形而上学的可能世界において経験的に知り得た命題が成り立つ場合があるという哲学史上画期的なことを明らかにしたが、それはまた同時に近世哲学以来の常識を覆し、従来、あまりに形而上学に対して否定的、懐疑的、消極的であった哲学者に、形而上学の可能性を開いたのである。

文 献

- 1) Kripke S (1971) Identity and Necessity. In Munitz MK ed., *Identity and Individuation*, New York U. P., pp135—164.
- 2) Kripke S (1972) Naming and Necessity. In Davidson & Harman G eds., *Semantics of Natural Language*, Reidel Publishing. Published as a separate monograph as *Naming and Necessity*, Basil Blackwell, 1980, pp107ff.
- 3) Putnam H (1975) *Mind, Language and Reality*, *Philosophical Papers*, vol. 2, Cambridge U. P., pp223 ff.